研究ノート

高 田 英 樹*

Manuscripts of Marco Polo's Travels (2)

-Orient of Marco Polo (2⁻²)-

Hideki Takata*

キーワード マルコ・ポーロ、磁器、盧溝橋、ジパング

次に、前稿「ザイトン 泉州」 2 で取り上げた158章「ザイトン」の磁器の箇所、および次稿で取り上げる106章「プリサンギン」(盧溝橋)と160章「ジパング」を対校する。ここでは内容の異同を主に見る 3 。

2.2 「磁器」

1) F: Bibl. Nationale de France, Paris, Ms.fr.1116 (74r.a20-29) 4

Et encore voç di que en ceste provence en une cite que est apelle tinugiu¹ se font escuelles de porcellaine grant e pitet les plus belles *que l'en peust deviser*, et en une autre part nen s'en font se ne en cest cite, et d'iluec se portent por mi le monde. Et hi n'i a aseç et grant merchies si grant que bien en aurest por un venesian gros III escueles si belles que miaus ne le seusent nul deviser. [Benedetto: 1 Tiungiu] ⁵

「さらにいいですか、この地方のティヌジュという市では大小のポルスレーヌの碗が造られ、それは*人が述べうる*最も美しいもので、その市以外の他のいかなる所でも造られず、そこから世界中に運ばれる。またいっぱいあってとても安く、一ヴェネツィアグロスで*誰もよりうまく述べることもできないほど*綺麗な碗が三つも得られるほどだ」

冒頭の Et encore voç di que を始めとして、前稿の歴代カアンの箇所とまさしく同じルスティケッロの言葉と文体であることが確認できる。磁器の美しさを強調する que l'en

peust deviser <述べ得る>と que miaus ne le seusent nul deviser <誰もよりうまく述べ 得ぬほど>の二つの修辞は、他の版では moult <とても>とか le piu <最も>といった 語で済まされるか省かれる。

その磁器の町をベネデットは tiungiu、ペリオは tinugiu に読む 6 。手稿本では n と u は判別し難く、どちらとも読めるが、F 写本に見る限り -un- よりは -nu- に近い。第 2 音 -giu は州の対音であり、漢字が単音節である原則からすれば、第 1 音は tinu- よりも tiunの方が相応しいが、この町がどこか同定されず、対応する漢字が定まらない。他の写本でも様々に異なる 7 。

2) FG: Bibl. Nationale de France, Paris, Ms.fr.5631 (63v.a29-35) 8

Et sachies que *pres de ceste cite de Cairon*¹ a une *autre* cite qui a nom tiunguy², la ou l' en fait *moult* d'escuelles *et* de pourcelainnes qui sont *moult* belles. Et en nul autre *port* on n'en fait forz³ que en cestuy, et en y a l'en moult bon marchie. [Pauthier: 1 Çaiton 2 Tiungui 3 fors]⁹

「このサイロン市の近くにティウングイという別の市があり、そこではとても綺麗な碗とポルスレーヌがたくさん造られることをご存じ下さい。そこ以外のどこの港でも造られず、そこではとても安い」

全体的に要約され短縮していることの他に、内容に係わる誤読が目立つ。まず磁器の町について、Fでは単に en ceste provence <この地方>であったのに対して、「pres de ceste cite de Cairon <このカイロン市の近く>に置かれる。Cairon は Çaiton <ザイトン>の誤記。前述のごとくティンジュはどこか定まらないが、この文によるとザイトンの近くの autre <別の>町となり、その同定に係わる。次に、F escuelles de porcellaine <ポルスレーヌの碗>に対して、d'escuelles et de pourcelainnes <碗とポルスレーヌ>と並べられる。これでは、pourcelainnes とは何か理解しなかったことになる。さらに、F part < ところ>は port <港>と誤読されている。

3) TA: Bibl. Nazionale Centrale di Firenze, Ms.II.IV.88 (61r.17-22) 10

E in questa provincia ae ¹ una citta ch'a ² nome tenuguise ³, che vi si fanno le piu belle iscodelle ⁴ di porciellane ⁵ del mondo. Et non ne se ne fae inn altro luogho del mondo et quindi si porta in d'ongni ⁶ parte, et per uno viniziano se n'avrebbe tre le piu belle del mondo et *le piu divisate*. [Ruggieri: 1 hae 2 c'ha 3 Tenugnise 4 scodelle 5 porcellane 6 d'ogni]¹¹

「またこの地方にテヌグイセという市があり、そこではこの世で最も美しいポルチェッラーナの碗が造られる。世界の他の地では造られず、だからそこからあらゆるところに持ち運ばれる。また、一ヴェネツィア [銀貨] でこの世で最も綺麗で*様々なの*が三つも得られるだろう」

全体的縮約は FG と同じであるが、上のような誤解はない。tenuguise は、Fの tinugiu se font escuelles <ティヌジュで碗が造られる>の tinugiu と se がくっ付いたもの。 TA^2 (フィレンツェ国立図書館 Ms..II.IV.136) でも同じであることからして、TA の祖本にまで遡るとみられる。第 2 音 -gui は、手稿本では i の上の点が打たれないため、-iu か -ui か 判別し難いことによるもので、州 -chou/-zhou の対音であるから Fの -giu がより近い。第 1 音 tenu- は、FG の tiun- よりも Fの tinu- に近い。最後の divisate < 多様な>は、Fの deviser <述べる>がイタリア語 divisate < 区別する>と混同され、その過去分詞 divisate の形容詞形と解されたものである divisate の形容詞形と解されたものである divisate の形容詞形と解されたものである divisate に

4) VA: Bibl. Civica di Padova, Ms.CM 211 (56v.14-16) 13

Anchora in questa contra è una zita a nome linigui, in la qual se fa schudelle de porzellane *de mar* molto belle.

「さらに、この地域にはリニグイという市があり、そこではとても綺麗な*海の*ポルゼッラーナの碗が造られる」

縮約の度はさらに増し、磁器生産の事実を述べるに止まる。 linigui は語頭 t の 1 への誤読。 碗は de porzellane de mar < μ mar mar

5) P: Bibl. Riccardiana di Firenze, Ms.Riccardiano 983+2992 (69r.b21-25) 14

In hac regione est ciuitas Tingui, ubi scutelle pulcherrime fiunt de terra que dicitur porcellana.

「この地域にはティングイ市があり、そこではポルケッラーナと*呼ばれる土からとて*も綺麗な碗を造る

縮約については VA と同じで、P の主底本がそれであることをよく示す。町の名 Tingui が VA より良好なのは、上のパドヴァ写本(VA³)が1445年のものであるのに対して、この P が14世紀前半とより古く原本に近いからである。 VA の最も古いカサナテンセ写本 (VA¹) はこの章を含む後半を欠き、祖本ではどのようであったか確かめ得ない。一方、 de terra que dicitur porcellana <ポルチェッラーナと呼ばれる土から>と、碗ではなく土と解されている。これらからして、もとはタカラ貝を意味した porcellaine / porcellana を、すでにこの時代に<磁器>と訳していいかためらわれる。

6) Z: Archivio Capitulares de Toledo, Ms.49.20.Zelada (52r.18-52v.9) 15

Et etiam in hac patria ¹ prouincia ² quedam ciuitatis ³ nomine Tinçu, ubi fiunt para-

sides de porcelanis in magna quantitate pulcriores que que possint inueniri. & in illa ⁴ ciuitate fiunt preterquam in ista & ab ista ciuitate feruntur per mundum in multas partes. & sunt ibi multe & pro bono foro, ita quod pro uo ⁵ grosso veneto haberentur tres parasides ualde pulcre. & parascides iste de huiusmodi terra fiunt: videlicet quod illi de ciuitate coligunt limum & terram putridam, & faciunt magnos montes & sic eos dimitunt per xxx & xl annos quod ipsos montes non mouent. & tunc terra in illis montibus tam longo tempore ita conficitur. quod parascides facte ex ipsa colorem habent accuri. & sunt ualde relucentes & pulcerime ultra modum. Et debetis scire quod cum homo terram illam congregat pro filijs eius congregat; videlicet quod propter longum tempus quo debet quiescere ad confectionem ipsius, non sperat consequi inde lucrum nec ponere ipsam in opus set filius qui post ipsum est uicturus fructum consequitur ex ipsa &ct. [Barbieri: 1 <et> 2 <est> 3 civitas 4 nulla 5 uno]¹⁶

「またこの国の¹⁷地方にはティンズという町があり、そこでポルスレーヌの碗が大量に造られ、それは見出し得る最も美しいものである。ここ以外のどの町でも造られない。そしてこの町から世界中の多くの地に運ばれる。ここではたくさんまた安く売っているから、1 ヴェネツィアグロッソで素晴らしい碗が三つ得られるだろう。その碗は次のような土から造る。すなわち、この町の者たちは泥や腐食した土を集めて山と積み上げ、それを30年40年と動かさないでそのままにして置く。やがて山の土はその長い間に精錬され、それから造られた碗は青色を帯び、とても輝いて殊のほか美しい。また、ご存じありたいが、その土を集めるとき、自分の息子たちのために集めているのである。つまり、精錬のために寝かせておくべき長い期間ゆえ、それで金を儲けることも使うことも期待できず、それから利益を手にするのはその後に生きる息子の方なのである、云々」

前半は、冒頭の et encore voç di que が省かれている以外、表現上の小さな異なりは別として、内容的に下と全く同じといってよい。文体的にも前の歴代カアンの個所に見た、自分の言葉での書き換えともいえたピピヌスのラテン語よりずっと下に忠実である。ところが器の造り方について語る後半 & parascides iste de huiusmodi terra fiunt 以下は、下系Aグループのテクストにはない全く新しいしかも詳細なものである。前稿「ザイトン泉州」で述べたごとく、オリジナルからあったのが下で省略されたのかそれとも Zで加筆されたのか、今のところ決める手立ては見つからない。

最後は&ct <云々>と終わる。これが、まだ続きがあるが省略するという意味か、それとも適当に省略してきたという意味かは分からないが、少なくともその一部はRにうかがうことができる。

7) R (p.248, I.33-p.249, I.9) ¹⁸

Il fiume che entra nel porto di Zaitum è molto grande e largo, e corre con grandissima velocità, ed è un ramo che fa il fiume che viene dalla città di Quinsai; e dove si parte dall'alveo maestro vi è la città di Tingui, della qual no si ha da dir altro se non che in

qualla si fanno le scodelle e *piadene* di porcellane, in questo modo, *secondo che li fu detto*. Raccolgono *una certa* terra *come di una minera e* ne fanno monti grandi, e lascianli al vento, *alla pioggia e al sole* per trenta e quaranta anni, che non li muovono: e in questo spazio di tempo la detta terra si affina, che poi si può fare dette scodelle, *alle qual danno di sopra li colori che voglion, e poi le cuocono in la fornace*. E sempre quelli che raccolgono detta terra la raccolgono per suoi figliuolo o *nepoti*. Vi è in detta città gran mercato, di sorte che per un grosso veneziano si averà *otto* scodelle.

「ザイトンの港に注ぐ川はとても大きく広く、非常な速さで流れ、キンサイ市から来る川の支流をなす。その本流から分かれる所にティングィの町があるが、そこはポルチェッラーナの碗や皿が造られること以外語るべきことはない。彼に語られたところによると、次のように造る。すなわち、ある種の土を鉱脈のようなところから集め、それを山と積み上げ、30年40年と動かさないで、風・雨・日にさらしたままにして置く。この間に土は精錬され、その後上述の碗を造り、その上に好みの色を付け、しかる後竈で焼く。また、その土を集める者はいつでも、自分の息子か孫のために集めるのである。この町ではとても安く、そのため1ヴェネツィアグロッソで碗が八つ得られるだろう」

このようにRは、F・P・Zとも異なりを見せる。前半、最初の川については前の杭州や福州の章の記事を加えた要約である。Tingiu は Z と一致する。碗に加わった piadene <皿>は VB からである。他は、磁器の製造以外 no si ha da dir altro <他に語るべきことはない>と端折る。全体として訳ではなく書き換えと言ってよい。一方、後半の造り方は基本的に Z と一致するが、alle qual danno di sopra li colori che voglion, e poi le cuocono in la fornace <その上に好みの色を付けしかる後竈で焼く>と、新たな情報を伝える。以下、この磁器の記事、とりわけ Z と R が引き起こすマルコ・ポーロの書のオリジナリティーに係わる問題については、前稿に譲る。

2.3 プリサンギン 盧溝橋

本書に登場する北京のみならず中国全土における建造物は数多いが、大都の部を終って内陸部への旅の出発点となる第106章「プリサンギン」の盧溝橋は、当時の物がほぼ元のまま残っている唯一のものである。しかもこの橋には、その情景を細密に描いた確実に元代のものと見なされる絵「盧溝運筏図」(北京国家歴史博物館)が今に伝わる。橋は1189-92年建設になる石造りで、11のアーチからなり、全長266.5 m幅7.5 m、両側を石の擁壁と柱で囲われ、柱頭には全て獅子の彫刻を戴く。これらの形状は創建以来基本的に変わっていない¹⁹。その点でこの記事は、同書の記述の真偽・精度や信頼度、それに各版の異なりを検証する格好の材料を提供する。実物および図との検討は次稿に回し、ここでは各版の異同を主に見る。

1) F: Ms.fr.1116 (49r.a23-b21) 20

Quant l'en s'en part de la uille 1 et il est ales X miles adonc trove un grant flum qui est

apelles pulisanghinz, le quel flus ala dusque a la mer osiane, et chi² alent mant merchanz con ³ mercandies⁴. Et desus cest flum a u⁵ mout biaus pont de pieres, car sachies que pont n'a en tout lo monde de si biaus ne son paroil. ⁶ raison comant: ie uoç di qu'il est lonc bien CCC pas et large VIII. car bien hi puet aler X chrs⁷ le un iuste l'autre. il ha XXIIII arch⁸ et XXIIII more les⁹ en l'eiue et est tout de marbre bis, mout bien cures et bien asetes. il a de chascunz les dou pont, a¹⁰ un mur de tables de marbres et de colones si fait con ie uoç dirai. il est fiches en chief dou pont une colone de marbre, et desot la colone a un lion de marbre et desus la colone en a un autre mout biaus et grant et bien fait. et longe¹¹ de cest colone un pas et mi en a un autre toute ausi fait con deus lions. et de le une colone a l'autre est clous de table de marbre bis, por ce que les iens ne peussent cheoir en l'aiue. Et ensint uait de lonc al lonc si que bien est bielle chouse a ueoir. *Or uoç auon dit de cest biaus pont et uoç conteron de noues chouses*. [Benedetto: 1 [de Canbaluc] 2 qui 3 [mantes] 4 mercandie 5 u[n] 6 [Et vos dirai] 7 chevaliers 8 arc 9 moreles 10 - 11 logne]²¹

「[カンバルクの]町を発って10マイル行くと、プリサンギンと呼ばれる川があり、その川は大洋にまで至っている。そこを多数の商人が[たくさんの]商品をもって行く。その川にとても美しい石の橋がある。実際、世界中でこれほど美しい橋も較べられるものもないことをご存じください。どのようか説明[しよう]。いいですか、長さゆうに300パスに幅8パス、だから10人の騎兵が横に並んで十分通ることができる。24のアーチと水中に24の橋脚があり、全て灰色がかった褐色の大理石造りで、とてもうまく造られうまく据えられている。橋の両側に大理石の板と柱の擁壁があり、これからお話しするようになっている。橋の端に大理石の柱が一つ立っており、その柱の下に大理石の獅子が一つあり、柱の上にもとても綺麗で大きくうまく作られた別のが一つある。その柱から1パス半離れてすっかり同じように作られた別のがあって、やはり獅子が二つある。そして一つの柱から次のへ、人が水に落ちないように灰色がかった褐色の大理石の板で塞がれている。端から端までずっとこのようになっており、見て素晴らしいものである。さて、この美しい橋について述べたから、次は別のことをお話しよう」

アーチは実際にも図でも11、橋脚は両端を含めると12であり、「24」の数字の根拠と経緯は分からない。両側の擁壁と柱の描写は実際と合致する。ただし、獅子は柱頭だけで下にはない。橋の端にある「大理石の柱」というのが、橋の擁壁の最初の柱なのか、それともその前にある、現実にあり図にも描かれている高く大きい別の柱(華表)のことなのか明確ではない。Rではその二つが区別されていることは後に見る。最後の次章へのつなぎの文は他版にはない。

2) FG: Ms.fr.5631 (44r.a18-b20)

Quant l'en se parte de la cite de Cambalu et l'en a cheuauchie X milles, si treuve l'en un moult grant flun qui est appelles pulisangins, le quel flun vait a la mer osianue 3,

e quoy vait pluseurs marchans auec leur marchandises dessus ce flun. Si y a moult biau ⁵ pont de pierre, car sachiez pou en y a de si biaus ⁶. Et est si fait. Il est lonc bien III cens pas et de le VIII, car bien pueent ⁷ aler dessus X hommes a cheual de front. Il y a XXIIII arches et XXIIII *moulins* en l'yaue. et est touz ⁸ de marbre bis moult biaus ¹⁰ et bien fait et bien assis. Il y a de chascune part du pont par dessus I mur de tables de marbre et de columbes ⁹ einsi ¹⁰ fait. Il a au chief une coulombe de marbre et dessus la coulombe I lion de marbre, *si que la coulombe est dessus les rains au lyon*. Et par dessus celle coulombe si a un autre lyon de marbre, lesquielx ¹² lyons sont moult biaus et granz et bien *entailliez* soutilment. Et loins de ceste coulombe, et dessus les rains au lyon, loins *I pas*, si a une autre coulombe auec II lyons ainssi faite, ne plus ne mains ¹³ comme la premiere. Et de l'une coulombe a l'autre, si est clos de tables de marbre bis, a ce que les genz ne chieent ¹⁴ en l'yaue. Et ainsi ua de lonc en lonc *d'une part et d'autre*. par quoi c' est une moult belle chose a ueoir. [Pauthier: 1 appellez 2 Poulisanghins 3 occeane 4 moult 5 beau 6 · 10 beaus 7 pevent 8 tout 9 coulombes 10 ainsi 12 lesquelz 13 moins 14 cheient]

24の moulins < 水車> というのは、F moreles < 橋脚> の誤読である。coulombe は colonne < 柱> の古形、獅子がその柱の上下にあるというのは同じであるが、si que la coulombe est dessus les rains au lyon < こうして柱は獅子の腰の上にある> と、F にはない説明が加えられている。rain は rein < 腰> の古異形。もう一つの FG 稿本パリ国立図書館 Ms.fr.2810 (FA 2) は豪華な挿絵で知られるが、その絵では獅子は柱頭のみである。ちなみに、水車はなく五つだけであるが橋脚があり、代って背景の山上に風車が一つ描かれている 22 。

3) TA: Ms.II.IV.88 (42r.10-27)

Quando l'uomo si parte di Chamblau¹ presso alle x miglia si truova un fiume, il quale si chiama pulinzanchiz, lo quale fiume va insino al mare occeano, et quinci passano molti merchatanti chon molte merchatantie². e in su³ questo fiume a⁴ un molto bel ponte di pietre. et si vi dicho che al mondo nonn'a⁵ uno chosi fatto perch'egli ⁶ lungo bene ccc passi et largho otto, che vi puote andare bene x chavalieri allato l'uno all'altro, et v'a⁷ xxxiiii archi et xxxiiii pile nell'aqua, et de⁸ tutto di marmo, et d'a⁹ cholonne chosi fatte come io vi diro. Egli è fitto dal chapo del ponte una cholonna di marmo, et sotto la cholonna ae¹⁰ uno lione di marmo. Et di sopra un'altro molto begli et grandi et ben fatti. Et di lungi a questa cholonna *un passo*, n'a un'altro ne piu ne meno fatta, con due leoni. et dall'una cholonna all'altra è chiuso di tavole di marmo, percio che niuno potesse chadere nel'aqua. Et chosi va di lungho in lungho *per tutto* il ponte, sicch'è¹¹ la piu bella chosa del mondo a vedere. [Ruggieri: 1 Camblau 2 mercatanzie 3 - 4 ha 5 non ha 6 [è] 7 v'ha 8 ed è 9 ed ha 10 hae 11 sì ch' è]

アーチと橋脚 pile の数 xxxiiii <34> は、単純な転記間違いであろう。柱と柱の間つまり 擁壁の幅は、Fの「1パス半」に対して FG と同じく $un\ passo$ <1パッソ>に減じている(1パスは約150cm)。実物は柱が幅約30cm、擁壁は120-200cm と様々である。

4) VA: Ms.CM 211 (41r.25-41v.8)

Quando l'omo se parte da Chanbellu, el va diexe meglia e trova uno 1 gran fiume ch' è apellato pulisanglinz, el qual dura perfin nel mar oziano. E per quel fiume va molte nave chon marchadantie al mar ozian. Suxo questo fiume è uno di 2 plui belli ponti che sia al mondo. Ell è longo ben *quatrozento* passa e largo ben oto passa, sì che puo ben andar diexe chavalieri pari per lo ponte. Ed à vintiquatro archi e vintiquatro pille, le qual è tute de marmaro molto ben lavorade. Da zaschaduno lato è uno muro de lastre de marmoro, et è do cholone lavorade a chotal muodo. In chavo del ponte è una cholona de marmoro, et è suxo uno lione de marmoro, e soto la colona un altro molto grande. E lonzi dala cholona un passo e mezo si è un'altra colona al muodo dela prima chon do lioni de marmoro; dentro quelle do cholone si è uno muro *basso* de marmoro. E chussi è fato tuto el ponte fina al'altro chavo, *dal'uno lato al'altro*, si che quel ponte è lla plui bella cossa del mondo da vedere. [Barbieri: 1 un 2 d'i]

長さ quatrozento passa <400パッサ>は単なる誤記であろうが、約600m となり、現実の266m との差はさらに広がる。また、擁壁の basso <低い>は他版にない。実物は高さ80 \sim 90cm である。

5) P: Bibl. Riccardiana di Firenze, Ms.Riccardiano 983+2992 (48r.b 7 -48v.a14)

Post recessus a ciuitate Cambalu per miliaria x quidam magnus fluuius inuenitur, qui dicitur pulisanchinç, qui ad mare occeanum terminatur. per hunc fluuium *naves* multe cum mercatioribus maximus deducuntur. Ibi autem pons marmoreus est pulcherrimus, habens longitudinis passus trecentoç et latitudinis octo, per quem¹ militeç decem collaterales in simul ire possunt per latus² ipsius. Habet ille pons arcus xxiiii et in aqua totidem pilas marmoreas. Cortina vero pontis seu murus in latere talis est. In pontis capite ex latere est columpna³ vna marmorea, habens pro base leones⁴ unum marmoreum et pro capitello leonem alium marmoreum. ultra quam columpnam ad spacium *passus unius* est columpna alia, duos similiter marmoreos leones habens ut prima. Inter columpnas vero *duas* est cortina marmorea coloris grisei, et sic proceditur⁵ ex ambobus⁶ lateribus pontis a principio ipsius usque ad finem eius. Ita ut per hunc modum *sint ibi leones marmorei bene mille ducenti*, propter quod pons ille sumptuosus et pulcher est super³ modum. [Müller: 1 quam 2 latidudinem 3 columna (以下同) 4 leonem 5 procedunt 6 duobus 7 supra]

川を往来するのは、「商人」ではなく naves <船>に変っている。最後の獅子の総数 mille ducenti <1200>は他版にはない。橋の長さ passus trecentoç <300パッソ>と柱間 の幅 passus unius < 1パッソ>をもとに計算されたものであろうが、ピピヌスの原訳からあったか疑問である。写字生の介入が疑われる。現在では、柱は両側で計281、獅子は 柱頭の大獅子の他にその足元や背中に子獅子198、合計479が数えられる。しかし、欄干の柱の下に獅子があった事実はない。

6) Z: Ms.49.20.Zelada (22r.14-21)

Quando uero discedendo a ciuitate predicta, scilicet canbalu¹, itum est miliaribus x, inuenitur quidam fluuius nomine pulisanghyn, qui in occeano mare intrat. supra flumen istud est quidam pons lapideus ualde pulcer, et raro quod sit in mundo alius ita pulcer. longitudo eius est trecentorum passuum. latitudo vero viii, ita quod large posent per eum homines unus a latere alterius equitare, &ct. [Moule: 1 Cambalu]

橋の長さと幅のところで終わり、後は&ct < 云々>と省略される。写字生が転記の価値と興味を見出さなかったのであろう。が、幸いなことに、その後に記されてあったであろうことを次のRから推定することができる。

7) R: (p.194, l.19~p.195, l.7)

Come si parte dalla città di Cambalú e che s'ha camminato dieci miglia, si truova un fiume nominato Pulisangan, il quale entra nel mare Oceano, per il quale passano molte navi con grandissime mercanzie. Sopra detto fiume è un ponte di pietra molto bello, e forse in tutt'il mondo non ve n'è un altro simile. La sua longhezza è trecento passa e la larghezza otto, di modo che per quello potria commodamente cavalcare dieci uomini l' uno a lato all'altro. Ha ventiquattro archi e venticinque pile in aqua che li sostengono, ed è tutto di pietra serpentina, fatto con grand'artificio. Dall'una all'altra banda del ponte è un bel poggio di tavole di marmo e di colonne maestrevolmente ordinate, e nell'ascendere è alquanto più largo che nella fine dell'ascesa, ma poi che s' è asceso, si truova uguale per longo come se fosse tirato per linea. E in capo dell'ascesa del ponte è una grandissima colonna e alta, posta sopra una testuggine di marmo; appresso il piede della colonna è un gran leone, e sopra la colonna ve n'è un'altro. Verso l'ascsa del ponte è un'altra colonna molto bella, con un leone, discosta dalla prima per un passo e mezzo; e dall'una colonna all'altra è serrate di tavole di marmo, tutte lavorate a diverse scolture e incastrate nelle collonne da lì per longo del ponte infino al fine. Ciascune colonne sono distanti l'una dall' altra per un passo e mezzo, e a ciascuna è sopraposto un leone, con tavole di marmo incastratevi dall'una all'altra, accioché non possino cadere coloro che passano: il che è bellissima cosa da vedere. E nella discesa del ponte è come nell'ascesa.

基本的には F とよく一致した諸版に対して、R はかなりの異なりを見せる。川を往来する navi <船>は前掲のごとく P から、柱の数 venticinque <25>はラムージャの訂正であろ う。橋を che li sostengono < 支える橋脚 > 、「大理石」に対する pietra serpentina < 蛇紋岩 > 、 colonne maestrevolmente ordinate <堂々と並ぶ柱>も、写字生あるいは編訳者の補筆で ありえる。一方、nell'ascendere è alquanto piú largo che nella fine dell'ascesa, ma poi che s' è asceso, si truova uguale per longo come se fosse tirato per linea <上り口の所の方が上 りの最後より幾分広いが、上り切ったあとはまるで一直線のように同じ長さになっている >は、他版にはないが現実と正確に合致する。さらに、E in capo dell'ascesa del ponte è una grandissima colonna e alta, posta sopra una testuggine di marmo; <また橋の上り口 にはとても大きな高い柱があって、大理石の亀の上に置かれている>と、欄干の柱とは別 の大きく高い柱の存在を伝える。事実、橋の両端左右には高い華表があって、<大理石 の亀>ではないが亀甲形の台座の上に立っている。また、擁壁は tutte lavorate a diverse scolture <どれもさまざまな彫刻が施され>も他版にはない情報であり、様々ではなく一 様であるが、確かにどれにも枠取りと雲紋が彫られている。ただし、擁壁板も柱もその上 の獅子も全て大理石ではなく砂岩である。最後の、E nella discesa del ponte è come nell' ascesa <橋の下りは上りと同じようになっている>も、そのとおりである。これらを、現 場を知らずして想像で加えることは難しいであろう。他の版にはないことからして、Rの 底本の一つ Z¹ (ギジ稿本) からと見られる。ところが一方では、実際との大きな食い違 いであるアーチ(と橋脚)の数「24」と柱の下の「獅子」はそのまま残っている。

2.4 ジパング

帰路の部の最初に置かれる「ジパング」は3章(160-162)からなる。ここではその最初の章、黄金島伝説の発端となった冒頭の紹介の部分と、フビライのジパング遠征の記事の前半を対校する。Fと $Z \cdot R$ の異なりのみを取り上げ、詳細は次稿に譲る。FG·TA·VA·Pは、Fとの大きな違いはないゆえ省略する。 23

1) F: Ms.fr.1116 (75r.a18-75v.a33) 24

Cypngu¹ est une isle a leuant, qui est longie de tere en aut mer MD miles. elle est mout grandissmes² ysles. les iens sunt balances, de beles maineres e biaus. il sunt ydules e se tienent por elz et ne ont seignorie de nul autres homes for que d'eles meisme. Et si voç di qu'il ont or en grandismes abondance, por ce que le or hi se trouent outre mesure. Et si voç di que nulz home ne³ trait hor de celle ysle, por ce que nulz merchant ne autre home hi ala de la tere ferme. e por ce voç di qu'il ont tant or con⁴ ieo voç ai dit. Et si voç conterai une *grant meruoie* d'un palais dou seingnor⁵ de ceste uille⁶. ie vos di tout uoiramant que il ha un grandisme palais, les que⁷ est tout couerto d'or fin. tout en tel mainer come⁸ nos couron nostre maison de plobe⁹ e nostre yglise, tout en tel mainere est cest palais couert d'or fin, que ce uaut tant cha¹⁰ poine se poroit conter. Et encore uos di que tout le pauimant de seç canbres, que aseç hi ni¹¹ a, sunt ausint d'or fin, bien

gros *plus de II doies*. et toutes les autres pars dou palais e la¹² sale e les fenestre sunt ausint aornes d'or. ie voç di que cest palais est de si desmesuree richesse que trop seroit grandisme meraueie qui peusse dir sa uaillance. et il ont perles en abondance et sunt roies moult bielle e reonde e groses. elle sunt de si grant uaillance com les blances e plus. il ont encore maintes autres pieres presioses aseç. elle est riche isle que nulz poroit conter sa richesse.

Et si voç di que por la grant richesse que l'en contoit au grant chan, ce fui cestui cublai que ore reingne, que en cest¹³ isle auoit, il dit qu'il la uoloit faire prendre. et adonc hi mande II sec barons cun grandismes quantite de nes con homes a cheualz et a pies. le un de cesti baronz avoit a no¹⁴ abatan e l'autre vonsanicin. cesti II barons estoient saies e uailanse¹⁵. Et que voç en diroie? il naierent da çairon¹⁶ e da quisai¹⁷ e si mistrent en la mer, et alent iusque a ceste isle. e desenderent en tere e prestrent des plain e des casaus asez, mes nulle cite ne chastiaus ne avoient encore pris, quant il auint lor une male auenture tel com ie uoc deuiserai. Or¹⁸ sachies que entre cesti II baronz auoit grant enuie e ne fasoit le un por l'autre 19. or auent un ior que le lune 20 a tramontaine uent si fort que celz de l'ost distrent que se il ne se partent que toutes lor nes se ronperont. Et adonc montent tuit en lor nes, e se partire de celle isle, e se mistrent en la mer. et voç di que quant il furent ales entor IIII miles²¹, adonc treuuent une autre ysle ne trop grant. e celz que postrent monter ²² celle isle escanpent, mes celz que ne postrent monter ronperent a cel isle. E ce furent bien xxx M homes que sus ceste isle escanpent. e cesti se tenoient tuit mors et auoient grand doulor, por ce qu'il voient qu'il ne poient escanper. e ueoent que les autres nes, que escanpes estoient, s'en aloient uer leur contree. Et elle ensi font que ie uos di qu'ele naient tant qu'il s'en tornent en lor pais. or laison de cesti que s'en sunt ales e nos retorneron a celz de l'isle que mort se tenoient. [Benedetto: 1 Cipangu 2 grandismes 3 n'e[n] 4 com 5 seignor 6 ille 7 que[l] 8 com 9 pl[n]be 10 qu'a 11 n'i 12 le 13 ceste 14 no[n] 15 vaillans 16 Çaiton 17 Qui[n]sai 18 Car 19 [ren] 20 vent 21 milles 22 [sus]] 25

「チバングは東の方の島で、陸から沖合いに千五百マイル離れている。ものすごく大きい島である。人々は色白く、礼儀よく、美しい。偶像崇拝で、独立しており、自分たち自身の以外に他の誰の支配ももたない。いいですか、金が大量にあるのですよ。そこには金がとんでもなく見つかるからです。それにいいですか、大陸から商人も他の者もそこに行かないから、誰もその島から金を持ち出さないのです。だからいいですか、今お話したほど金がたくさんあるのです。この島の君主の宮殿の大なる驚異をお話しよう。全く本当の話、彼はとても大きい宮殿をもっていて、それはすっかり純金で葺かれているのですよ。ちょうど我々が家や教会を鉛で葺くように、ちょうどそのように宮殿は純金で葺かれている。だから、その価値を計算することはとうていできない。さらにですよ、いっぱいあるその部屋の床も同じく全て指二本よりも分厚い純金なのです。宮殿の他の部分も全て、広間も窓もやはり金で飾られている。いいですか、この宮殿はとんでもなく豪華だから、もし誰かそ

の価値を言えるとしたら、それはあまりにも大きな驚くべきことだろう。また真珠が豊富にあり、 赤く、とても美しく丸く大きい。白いのと同じかそれ以上の価値がある。その他にも貴石がいっぱ いある。豊かな島で、その富は誰も数えることができないだろう。

ところでいいですか、この島にある莫大な富のことをグラン・カン――今統治しているこのクブライ――に話したものだから、彼はそれを奪わさせたいものだと言ったのです。それで彼は、二人の重臣を騎兵と歩兵を載せたものすごい数の船とともにそこに派遣した。重臣の一人はアバタン、もう一人はヴォンサニチンという名だった。二人の重臣は聡明で勇敢だった。で、何を話そうか。彼らはザイトンとキ[ン]サイから出帆し、海へと乗り出した。そしてかの島まで来たった。上陸して平地と集落はたくさん奪ったが、市や城市はまだ一つも奪っていなかった。その時、今からお話するような悪い出来事が彼らに起こった。というのも、これら二人の重臣の間にひどい妬みがあり、互いに相手のために[何も]しなかったからであることをご存じください。さてある日のこと、北の風がとても激しく吹き、軍の者たちは出発しなければ船は全部壊れてしまうだろうと言った。それで皆船に乗り込み、その島から出発して海に乗り出した。そしていいですか、四マイルほど進むとさほど大きくない別の島を見付けた。その島[に]上れた者は助かった。が、その島に上れなかった者は破滅した。その島に助かった者は三万人もいた。彼らは皆死を覚悟し、大いに嘆いた。逃げることができないと分かり、助かった他の船が自分たちの地に行ってしまったのを見たからである。実際それらはお話したとおりにした。すなわち、船に乗って自分たちの国に戻ってしまったのだった。さて、行ってしまった者のことはさておいて、島で死を覚悟していた者たちのことに戻ろう」

 $Z \cdot R$ との異なりのうち事実に関わるのは唯一、床の黄金の厚さ plus de II doies < 指 二本以上>であるが、他版 FG·TA·VA·P には全てある。こうした数値に懐疑的な Z の 写字生が採らなかったのであろう。海での遭難の場面は Z と比べて簡略であり、auoient grand doulor < 大いに嘆いた>、Et elle ensi font que ie uos di < 実際それらはお話した とおりにした>等の一般化した表現は、詳細が縮約されたことを推測させる。最後の次章への繋ぎの文は他版にはある。

2) FG·TA·VA·P(省略)

3) Z: Ms.49.20.Zelada (55v.1-56v.17) ²⁶

Çypingu est quedam insula in leuante, que distat a terra et est in alto mari MD miliaribus. et est valde magna insula, cuisu gentes sunt albe, et de pulcra manerie et pulcre. adorant ydolla, et se manutenent per se ipsos, videlicet quod a proprio rege reguntur. habent aurum in maxima habundantia, quia ibi inuenitur aurum ultra modum. et nullus homo aurum de insula illa trahit, quia quasi nullus mercator uel alius de terra ferma partem illam frequentat. et ideo habent tantum aurum. Et uobis dicemus *inmensam diuiciarum excellentiam* palatii domini illius insule *dominantis, secundum quod dicunt homines scientes contratam*. habet enim quoddam palatium magnum totum auro copertum, quemadmodum plumbo domus nostras uel ecclesias coperimus. etiam omnia pauimenta camerarum, que multa sunt ibi, sunt de auro, ualde grossa. omnes alie partes palatii

et sale et fenestre sunt ornate auro. istud palatium est ita ultra modum magnarum diuiciarum, quod nullus posset ipsius ualorem aliqualiter explicare. habentur etiam *in hac insulla* perule infine¹, que sunt rubee, rotunde et grosse, que valent quanto albe et pluri. Et in ista insula aliqui sepeliuntur cum mortui sunt, aliqui comburuntur, sed² cuilibet qui sepelitur ponitur una ex perulis istis in ore; et talis consuetude apud eos seruatur. habentur etiam ibi multi lapides preciosi. ista insula est tam diues quod nullo modo possent eius divicie computari.

Et propter multas diuicias quas dicebatur magno can, videlicet cublay qui nunc regnat, esse in hac insula, ipse proposuit facere eam capi et eius dominio subiugari. misitque duos eius barones ad insulam capiendam, cum nagna quantitate nauium cum equitibus et peditibus; quorum baronum vocabatur unus abaccatun, alter vonsanciri. isti duo barones erant sapiente et probi; qui arripientes iter a çaitum et Qinsay, intrauerunt mare, et tantum nauigauerunt quod ad hanc insulam peruenerunt. Et descendentes in terram, ceperunt de planicie et casamentis multis; sed³ nondum aliquam ceperant ciuitatem, cum quoddam eis infortunium superuenit. Noueritis itaque quod inter istos duos barones multa regnabat inuidia. Nec unus secundum uelle alterius se habebat. accidit quadam die quod uentus tramontane fortiter flare incepit, et illi de exercitu dixerunt: si nos cum nauigio hinc non discedimus, omnes naues simul fragetur⁴. Et tunc intrauerunt naues, et ab illa insula discedentes in mare per miliaria nauigarunt quatuor. Et tunc incepit impetus uenti augeri, et multitudo nauium erat tanta quod inter se magna quantitas ex ipsis fuit confracta, naues uero que cum aliis calcate non erant, sed separate erant per mare, naufragium euaserunt. Sed⁵ ibi prope erat quedam alia insula, non nimis magna, ad quam multi ex naufragantibus euaserunt, et in maxima quantitate. alii uero, qui se reducere non ualuerunt ad insulam, totaliter perierunt. Et etiam in dicta insula multum de nauigio se confregit, illuc a uento compulso. cum uero impetus uenti et procellarum maris furor quieuit, duo barones, cum nauibus que per amplum maris naufragium euaserant, que erant in maxima quantitate, ad predictam insulam redierunt, et in nauibus asumpserunt omnes homines qui erant honoris, videlicet capitaneos centenariorum M et X^m , quia alios non poterant in nauibus collocare, tot erant ipsi. postmodum vero, secedentes ab inde, uella eorum versus patriam conuerterunt. Et alii in insula remanentes, qui erant multi, se tanquam mortuos reputabant, ignorando modum per quem inde secedentes possent ad salutarem portum uenire. nam uidebat⁷ naues que euaserant, ipsis relictis, uersus earum patriam remeare, que tantum nauigarunt quod ad patriam peruenerunt. [Moule: 1 infin[it]e $2 \cdot 3 \cdot 5$ set 6 uideba[n]t; Barbieri: 4 frange[n]tur]²⁷

「ジピングは東の方の島で、陸から千五百マイルの沖合いにある。とても大きな島で、人々は色白く、 礼儀よく、美しい。偶像を崇め、独立している、つまり自分たちの王により治められている。金が 大量にあり、そこには金がものすごく見つかるからである。誰もその島から金を持ち出さない。商

人あるいは他の者もほとんど誰も本土からそこへ往来しないからである。だからそれほど多くの金がある。島を統べている君主の宮殿の桁外れの無限の富のことを、かの地のことをよく知っている人たちの言うところにしたがってお話しよう。彼は大きな宮殿をもち、それはちょうど我々が館や教会を鉛で葺くように、すっかり金で葺かれている。たくさんある部屋の床も全て金で、とても分厚い。宮殿の他の部分も全て、広間も窓も金で飾られている。この宮殿はこのように莫大な富であるから、誰もその価値を言うことはできないだろう。この島にはまた、真珠が無数にある。赤色で、円く、大きい。白いのと同じかそれ以上の値打ちがある。この島では、死亡するとある者は埋葬されある者は火葬されるのだが、埋葬される者は誰でもそうした真珠を一つ口に入れられる。この風習は今も彼らの間で守られている。貴石も多くある。この島はそれほど豊かだから、どのようにしてもその富は計算できない。

この島にある莫大な富のことが、マグヌス・カンつまり今統べているクブライに話されたものだか ら、彼はそれを奪って*自らの支配下に置かせようと決意した。*で、二人の重臣を馬と歩兵を載せた 多数の船とともに*その島を奪い取るべく*派遣した。重臣は一人はアバカトゥン、もう一人はウォン サンキリといった。この二人の重臣は聡明で勇敢だった。彼らはザイトゥンとキンサイから出発し、 海に乗り出し、航海してその島にやって来た。上陸して、多くの平地や集落を奪った。しかし、彼 らに災難が降り掛かったとき、町はまだ一つも奪っていなかった。すなわち、これら二人の重臣の 間にひどい妬みがあり、互いに相手の意思に従おうとしなかったことをご存じください。ある日北 の風が強く吹き始めるということが起こり、軍の者たちは言った、「 *船団とともに*ここから遠ざか らなければ、船はみな壊れてしまう」。そこで船に乗り込み、その島から海に出て四マイル航海した。 が、風の勢いが激しくなり、船の数が多かったので、その大部分が互いに衝突して砕けてしまった。 他の船とぶつからず海上に分散していた船は、難破を逃れた。近くにさほど大きくない別の島があ り、海に漂っていた者の多くがそこに難を逃れた。その数は多かった。島にたどり着けなかった者 は皆亡くなった。その島ではまた、船団の多数の船がそこに吹き付ける風によって粉砕された。風 の勢いと海の嵐の怒りが収まると、二人の重臣は、広い海にあって難破を逃れた船――それは多数 あった――とともに前述の島に戻り、高い地位にあった者すなわち百人隊、千人隊、万人隊の長た ちを皆船に乗せた。その他の者は、数多かったから船に収容することはできなかった。その後そこ を去って、帆を祖国の方に向けた。島に残った他の者たちは、その数は多かったが、いかにしてそ こから逃がれ*安全な港にたどり着くことが*できるか分からずして、死ぬ他ないと考えた。実際、彼 らを残して船が祖国へと漕ぎつつ去ってゆくのを見ていた。船は航海を続けて祖国にたどり着いた」

島の君主の富のことを、secundum quod dicunt homines scientes contratam <かの地のことをよく知っている人たちの言うところにしたがって皆さんにお話しよう>は、この島のことが伝聞によるものであることからする Z の訳者の介入であろう。埋葬する死者の口に真珠を一粒含ませる風習、Et in ista insula … apud eos seruatur <この島では、死亡するとある者は埋葬されある者は火葬されるのだが、埋葬される者は誰でもそうした真珠を一つ口に入れられる。この習わしは今も彼らの間で守られている>は、Z・Rにしか見えない。ただし、日本にはそうした風習はなく、中国のものであった。真珠にちなんでここに置かれたものであろう。オリジナルからあったか追加かは判定し難い。

海での遭難の場面、Et tunc incepit impetus uenti augeri < その時風の勢いが増し始め> 以下は大きく異なる。Fのこの箇所「その島[に]上れた者は助かった。が、その島に上れなかった者は破滅した。・・・ 船に乗って自分たちの国に戻ってしまったのだった」にはない詳細であり、しかも『元史』等に伝えられる状況とよく一致する。上の真珠のような一まとまりの記事全体ではなく、異なるしかもより正確な文が随所に散らばっていることからして、これを後から加えることは難しく、元はこのようであったろうと推定され、Fの方がそれを要約したと見られる。

4) R (p.252, I. 3 ~ p.253, I.22)

Zipangu è un'isola in Oriente, la qual è discosto dalla terra e *lidi di Mangi* in alto mare MD miglia, ed è isola molto grande, le cui genti sono bianchi e belle e di gentil maniera. Adorano gl'idoli e mantengonsi per se medesimi, cioè che si reggono dal proprio re. Hanno oro in grandissima abbondanza, perché ivi si truova fuor di modo *e il re* non lo lascia portar fuori; però pochi mercanti vi vanno, *e rare volte le navi d'altre regioni*. E per questa causa diremovi la grand'eccellenza delle ricchezze del palagio del signore di detta isola, secondo che dicono quelli ch'hanno pratica di quella contrada: v'ha un gran palagio tutto coperto di piastre d'oro, secondo che noi copriamo le case o vero chiese di piombo, e tutti *i sopracieli* delle sale e di molte camere sono di *tavolette* di puro oro molto grosse, e cosí le finestre sono ornate d'oro. Questo palagio è cosí ricco che niuno potrebbe giamai esplicare la valuta di quello. Sono ancora in questa isola perle infinite, le quail sono rosse, ritonde e molto grosse, e vagliono quanto le bianche, e piú. E in questa isola alcuni si sepeliscono quando son morti, alcuni s'abbruciano, ma a quelli che si sepeliscono vi si pone in bocca una di queste perle, per essere questa la loro consuetudine. Sonvi eziandio molte pietre preciose.

Questa isola è tanto ricca che per la fama sua il gran Can ch' al presente regna, che è Cublai, deliberò di farla prendere e sottoporla al suo dominio. Mandò adunque duoi suoi baroni con gran numero di navi piene di gente per prenderla, de'quali uno era nominato Abbaccatan e l'altro Vonsancin, quali, partendosi dal porto di Zaitum e Quinsai, tanto navigorno per mare che pervennero a questa isola. Dove smontati, nacque invidia fra loro, che l'uno dispregiava d'obedire alla volontà e consiglio dell'altro, per la qual cosa non poteron pigliare alcuna città o castello, salvo che uno che presono per battaglia, però che quelli ch'erano dentro non si volsero mai rendere: onde, per comandamento di detti baroni, a tutti furono tagliate le teste, salvo che a otto uomini, li quail si trovò ch'avevano una pietra preciosa incantata per arte diabolica cucita nel braccio destro fra la pelle e carne, che non potevano essere morti con ferro né feriti. Il che intendendo, quei baroni fecero percotere li detti con un legno grosso, e subito morirono.

Avvenne un giorno che 'l vento di tramontana cominciò a soffiare con grande impeto, e le navi de' Tartari, che erano alla riva dell'isola, sbattevano insieme. Li marinari

adunque consigliatisi deliberarono slontanarsi da terra, onde, entrato l'esercito nelle navi, si allargarono in mare, e la fortuna cominciò a crescere con maggior forza, di sorte che se ne ruppero molte, e quelli che v'erano dentro, notando con pezzi di tavole, si salvarono ad un isola vicina a Zipangu quattro miglia. Le alter navi che non erano vicine, scapolate dal naufragio con li duoi baroni, avendo levati li uomini da conto, cioè li capi de' centenari di mille e dieci mila, dirizzarono le vele verso la patria e al gran Can. Ma i Tartari rimasti sopra l'isola vicina (erano da circa trentamila), vedendosi senza navi e abbandonati dalli capitani, non avendo ne armi da combattere ne vettovaglie, credevano di dovere essere presi e morti, massimamente non vi essendo in detta isola abitazione dove potessero ripararsi.

R の異なりのうち前半、e rare volte le navi d'altre regioni <他地域の船もめったに(行 かない) >は P より、i sopracieli < 天井>は、床が金であること不審に思った誰かが書 き換えたものか (P·VB[床」)。後半遠征譚の、腕に魔法の石を縫いこんでいた男たちの 話は、他版では次章に登場する。Rでここに置かれているのは、Pに倣ったためである。 遭難の場面はFとも Zとも異なる (斜字体部分): 「ある日、北の風が激しく吹き始め、 この島の岸にあったタルタル人の船はぶつかり合った。で、船員たちは相談してその地か ら遠ざかることに決め、兵が船に入ると沖合いに出た。*時化はますます激しくなり、*多く の船が壊れた。中にいた者は板切れに捉まって泳いで、ジパングから四マイルの近くの島 に逃れた。近くにいなくて二人の重臣とともに危うく難破を免れた他の船は、主だった者 つまり百人隊、千人隊、万人隊の隊長たちを救い上げ、祖国とグラン・カンに向かって帆 を揚げた。しかし、近くの島に残されたタルタル人(約3万人だった)は、船がなく隊長 たちから見捨てられたのを見、また戦うための武器も食糧もないまま、とりわけその島に は避難する住まいがなかったから、捕まって殺されるにちがいないと覚悟した」。これら の異なりのうち、二人の重臣が隊長たちだけを救助した記事は前述Zより(Pなし)、残 りは全てPからである。後者はどれも補足説明的なものであり、後から書き換えること も難しくはあるまい。

3. おわりに

ユールの言う「謎」のうち旅については、一つにはそれが本当に行なわれたかどうかを 疑わせしめるような誤りや偽りや欠落があることに、もう一つはそれを決定的な形で証明 する記録が存在しないことに基づいていた。

ここはそれらについて詳述する機会ではないが、同書には誤解・誤記・不正確・あいまいな伝聞や根拠のない推測などは確かに数多いし、多くはないが明らかな捏造・創作もあり、またよく指摘されるごとく、長城・漢字・茶・印刷術・箸等、必須とも言うべき中国事項のいくつかが欠けていることも事実である。これらに対してはしかし、作者は学の人ではなかったし東方の百科事典を意図したわけでもないとの一般的な弁護のほかに、それらとてポーロの旅を否定するもの、すなわちマルコが中国に滞在しなかったことの積極的

な証明とはならないと反論することもできる。否むしろ、それらを補って余りある膨大な 正確で詳細な記事の中にあって、それら不正確で誤った記事はかえって、同書の内容が他 の書物から写された間接的なものではなく、大部分は確かに現地に在った者によって直接 自らの目と耳で得られたものであることを逆に証していると言ってよいほどである。

それらが全てポーロによって体験・観察・記述されたものではありえず、他者や書き物から得られたものも多かったであろうことはいうまでもない。そのことは作者自身が同書の冒頭で、Mes auquens hi n'i a qu'il ne vit pas, mes il l'entendi da homes citables et de verité <しかし見たわけではないが信頼できる真実の人たちから聞いたこともいくらかあります>と正直に断っている。「いくらか」ではなくそのほうが数多いのであるが、後世それがまるで全てマルコの体験であるかのごとく思い込まれたのは、続いて宣言しているにもかかわらず、「見たことは見た聞いたことは聞いたと」、その後の個々の記事で区別して記さなかったためである。そのことの責はむしろ、筆録者ルスティケッロに求められるべきであろう。否、ルスティケッロは単に下のそれであり、他にも筆者のいたこともここに見てきたことからして確実であろう。それでもしかし、それら筆録者たちに大部分あるいは過半の資料や材料を提供したのはポーロであったとしてもおかしくはない。これらの問題をめぐっては、別に機会を改めて述べる。

次に、決定的な記録の欠如については、ユールから1世紀以上が経った今も状況は変わらない。フビライの宮廷に仕えた役人であったとの自称にもかかわらず中国のどの史書にもそれらしき名前の記載のないこと、コカチン姫を送ってのペルシァ使節一行の中に彼ら3人の名前の見られないことは夙に知られるし、その後ヴェネツィアの古文書庫に数多く発掘されたポーロに関わる文書にも、その旅を公式に記載したものは今なお発見されていない。また、その旅のためにいろいろと接触をもったという教会側の文書にも、東方交易に深く関わっていた市当局の記録にもポーロに言及したものはないし、彼らの活動や帰還を記した年代記もない。さらには、そこでかの書を編んだというジェノヴァのヴェネツィア人捕虜のリストの中にもマルコの名前はないし、その後かの旅行記が書かれたことを伝える同時代の記録もない。

不思議なことではあるが、これらもまたしかしその旅が行われたことを決定的に否定するものとなるわけではなく、旅行記の中で自称されている役割や活躍がおそらく誇張されたものであったことと、ポーロたちの活動が当時の関係者たちによって記録に留められるべきほど重要な意義を認められなかったことを意味するのであろう。

決定的な公式の文書はないが、一方その旅を傍証する記録や情況証拠は数多い。詳細は別のところで述べたが²⁸、とりわけヴェネツィア・サン・クリソストモ区のポーロの館の購入記録、伯父老マルコの遺言書、叔父マフェオの遺言書、麝香をめぐる裁判記録、自身の遺品目録、ラテン語訳者ピピヌスの序文、パドヴァの自然学者ダーバノの証言等である。が、それらよりも何よりも、かの旅行記そのものがその最大にして最良の証明であろう。現地に旅せずしてかの詳細にして正確な情報をもたらすことの困難なことはすべからく認められるし、細部はともかく、かの旅の経緯とその書の内容を全て創作あるいは捏造することはまずもって無理というものであろう。

とすれば、そのことは直ちに次の「謎」、ではその書はどのようにして成ったのかとの疑問へとつながってゆく。ヴェネツィアのポーロ家の3人が26年の長きにわたって東方に旅し、目撃と伝聞、自分と他人、体験と書物、事実と想像など、様々な形で膨大な情報を手に入れ、それをマルコがジェノヴァの獄でピーサの物語作家ルスティケッロに伝えて1298年に成立した、というのが同書の序文に書かれている経緯である。それ以上のことについては確かなことは何も書かれていない。マルコから提供された情報はどのような形だったか、二人の共同作業はどのように行なわれたか、ルスティケッロの役割はどの程度だったか、そうして編まれた最初のもの、オリジナルはどのようなものであったか、本当に1298年であったか、これらについては何も明らかでない。さらにその謎を増幅するのが、これほど様々な版が存在し、それらの間に大きな異なりがあるのはなぜか、はたしてどこまでがポーロの手になるものかという疑問である。

Fと通称されるパリ国立図書館 Ms.fr.1116が、ルスティケッロが筆録したというオリジナルに言語的には最も近いであろうと一致して認められることはすでに見た。他の代表的テクスト FG・TA・VA・P もそれに近い稿本からのそれぞれの言語や方言への翻訳であることも明らかになった。事実、内容的にも基本的によく一致している。一方、 $Z \ge R(\ge V \ge L)$ にはそれらF系のテクストにはない多くの新たな記事が見出されることも知られるところとなった。それがどれほど大きく異なるかは、上に見た磁器・盧溝橋・ジパングの記事に明らかであろう。

これら独自記事を、ユール他は、解放後マルコがヴェネツィアに残っていたメモをもとに書き加え、それらが次々と新たな写本に取り込まれていったと考えた。それを根拠がないと批判してベネデットは、ジェノヴァで作成されたオリジナルには全ての記事が含まれていたのだが、次々と転記される過程で抜け落ち、縮小され改変されて、今に見られるような内容しかとどめなくなった、という正反対の結論に達した。ベネデットのこの論証についても、別のところで述べた²⁹。

彼のその説は、説得力を持つ精緻なものであったが、もっぱら言葉の側からの文献学的証明であり、内容の側からの歴史的証明を欠いていた。とりわけ最後のアジア史の部分では、Zには1295年の帰国後どころか1298年の執筆以後の事件も記されている。また当時の歴史にもとる記述のあることは、一例として上の磁器の製造法のところに見た。記事によってはFとZで異なる情報源が挙げられ、それが互いに矛盾している場合もある。また何よりも、200箇所にも上る大量のしかも史実に合ったZの記事がF他のテクストで削除されたり欠落するに至った経緯が充分に説明されなかった。その原因・理由としてベネデットは、あまりにも子供っぽかったり、下品な話題であったり、宗教や道徳に触れる問題であったり、具体的な有益性がなかったり、あるいは訳者や写字生が信用しなかったり興味を持たなかったりしたことを挙げるのであるが、Fにはこれらの理由のそれぞれに該当する性格の記事が他にも多く残っている。それどころか不思議なことに、Z・RにあってFにない記事には、アフマド事件やフビライの側室選び、カタイの娘たちの暮らしぶりや福州の隠れキリシタン(マニ教徒)等、かえってより興味深いものが多い。しかも、前稿の磁器や筵凧や本稿の盧溝橋やジパングに見られるごとく、そのほぼ全てでより詳細にして

正確であった。

さらには、写本Fの正確な制作年代は不明であるが、それに近い一本(F^1)が、マルコから直接かどうかはともかく、1307年頃ヴェネツィアでティボー・ド・セポワの手に渡り、それに基づいて FG が作られたことはほぼ確かのようである。しかしながら、マルコが進呈したその稿本に Z の独自記事を含む全ての記事があり、それが訳者グレゴワールによって省略されて今のような姿になったとは、FG が F(および TA・VA・P等)と構成も内容もよく一致することからして考え難い。とすると、ベネデットの説を当てはめると、その稿本(F^1)の段階ですでに Z の独自記事は脱落していたことになり、1298年から遅くとも1307年のわずか10年間に200もの大量の記事が削除されたことになる。しかもその理由は不明である。しかもまた、FG の声明文にあるごとくティボーがマルコから直接進呈されたのなら、著者マルコは Z の独自記事をも含んでいたオリジナル版ではなく、F のような縮小版を与えたことになる。もしそうなら、マルコの手元には同書のオリジナルもしくはそれの忠実な写本はなく、ヴェネツィアに出回っていた縮小版を取り寄せてティボーに進呈したか、それともマルコから直接もらったというのは、自らの稿本に権威を付与するためのティボーの捏造か、どちらかである。ベネデットも、直接マルコからもらったとのティボーの言を疑う30。これらに対する納得のいく説明はまだ見出されていない。

ではもしそれら独自記事が、ベネデットの言うごとくジェノヴァのオリジナルの段階か ら含まれていたのではなかったとすれば、つまりFでの削除によるものではなくZでの 追加によるものであったとすれば、誰の手になるものか。ユールの言うごとく、解放後の ヴェネツィアでマルコによって書き加えられたのか。一例に見たごとく、内容からすれば ポーロのように東方に精通した者にしか書けぬ性質のものであり、その可能性はある。が、 それにしては考え難いような誤りが残っているのも否定しがたい。それとも、後世の全く 別の人物の手になるものか。Zは、ベネデットによればFよりも古い一フランク - イタリ ア語稿本からのラテン語訳であるが、それがいつ誰によって訳されたかは分からない。今 に伝わるゼラダ写本そのものは15世紀後半1470年頃作成になるものとされるが31、その間 の事情は全く知られない。オリジナルからすぐラテン語訳され、その一つから15世紀後半 にZが転記されたのか、それともどこかに伝わっていたオリジナルに近い写本からその 頃にラテン語訳されたのか、不明である。いずれにしてもZの祖本も残っていない。ラムー ジォのギジ写本も「150年前」つまり1400年頃のものだという。1世紀半以上のこの隔た りからからして、後世の追加の可能性も排除できない。そのラテン語も、上に引いたい くつかの文にも分かるごとく、Pのそれとは全く異なる新しいものであった。もしZがF や FG よりもオリジナルに近い一写本からのラテン語訳であったとすれば、15世紀後半ま でなぜ知られなかったのか。少なくともピピヌスは、自分のが最初のラテン語訳(1315年 頃)だという。もし15世紀後半にラテン語訳されたのなら、それの祖本はどのように保存 され、またその後どうなったか。これらも謎のままである。それでもベネデットによれば Zは、Fにない記事もFと一致する部分と同じ文体、つまりルスティケッロの文からであ るという。

このように、その旅にせよ書にせよ、あらゆるところで何らかの障壁や矛盾に出会う数々

の問題、まさしくユールの言う「謎」を解く手立ては、もはや今に伝わるこれら様々な稿本の中にしか残されていない。ここで行なった作業はそのための最初の一歩であるが、日暮れて道は遠い。

註

- 1. (1) は前号『大阪国際大学紀要国際研究論叢』vol.23-3, 2010, pp.131-151.
- 2. 拙稿³「ザイトン泉州 マルコ・ポーロの東方 (1)」『大阪国際大学紀要国際研究論叢』vol.23-2,2010,pp.133-152.
- 3. 欧文イタリック体と和文斜字体は、Fと他の版の異なりを示す。
- 4. Foto (1)
- 5. Benedetto p.160.
- Paul Pelliot, Notes on Marco Polo, Paris Imprimerie Nationale Librairie Adrien-Maisonneuve, 1959, 'Tingiu', pp.853-56.
- 7. Cfr. 拙稿³ pp.137-44.
- 8. Foto (2)
- 9. Pauthier pp.532-33.
- 10. Foto (3)
- 11. Ruggieri p.243.
- 12. Ruggieri は、この divisate を dipinte/disegnate <絵の描かれた>と注釈しているが、前稿で述べたごとく、13世紀末当時はまだ彩色絵付け磁器は造られていない。
- 13. Foto (4)
- 14. Foto (5)
- 15. Archivio y Biblioteca Capitulares de Toledo, Ms.49.20.Zelada: Foto ⑥
- 16. *Marco Polo Milione*, a cura di Alvaro Barbieri, Parma Ugo Guanda 1998, pp.246-48 [Barbieri]; A.C.Moule & Paul Pelliot, The Description of the World, vol.II, New York AMS Press 1976 (London 1938), p.lv-lvi [Moule-Z].
- 17. Zの原文 in hac patria provincia を、Barbieri は in hac patria <et> provincia <この国と地方に>と校訂するのに対して、Moule は in hac predicta provincia <前述のこの地方に>のことであろうと注記する(Moule-Z p.lv)。前者では意味が明確でないこと、patria は Z ではこうした文脈で使われていないことからして、後者の可能性が高い。
- 18. ここでは欧文イタリック体と和文斜字体は F·Z との異なりを示す。
- 19. 羅哲文他編『盧溝橋文集』新時代出版社 北京1987; 孫涛編『盧溝橋』文化芸術出版社 北京2002. Foto ⑦.1668年に橋の東端、全体の約7分の1が崩壊したが、後に修復されている。
- 20. Foto (8)
- 21. Benedetto pp.101-03.
- 22. Foto (9)
- 23. ここでは欧文イタリック体と和文斜字体は F と Z·R との異なりを示す。写本 F·Z には段落分けはないが、読みの便宜上改行を施す。
- 24. Foto [®] 25. Benedetto pp.163-64.
- 26. Foto ① 27. Moule-Z pp.lviii-lx; Barbieri pp.260-65.
- 28. 拙稿⁴「マルコ・ポーロ年次考(2) 中世ヴェネツィア年代記」『大阪国際女子大学紀要』 vol.25-2, 1999, pp.45-73.
- 29. 拙稿¹「ルスティケッロ・ダ・ピーサーーマルコ・ポーロ旅行記の筆録者」『大阪国際女子大学紀要』 vol.24-2, 1998, pp.16-18,
- 30. Benedetto, 'Introduzione' pp.LVI-LX.
- 31. ムールによれば、1470年頃は Sir Sydney Cockerell と E.H.Minns による判定。近代の転記者トアルドは1400年頃、トレドの研究者は15世紀前半に置く (Moule, 'The Introduction' p.50)。バルビエーリは15世紀後半イタリア北部作とする (Barbieri p.178)。

Foto ① F: Ms.fr.1116

(74r.a20-29)

Foto ② FA¹: Ms.fr.5631 (63v.a29-35)

Foto ③ TA1: Ms.II.IV.88 (61r.17-22)

Foto 4 VA3: Ms.CM 211 (56v.14-16)

portul ille punt et mais portulana un regione que ubi et melioribi qui in

Foto ⑤ P9: Ms.Riccardiano 983+2992 (69r.b21-25)



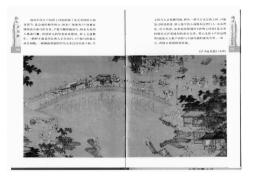


Foto 6 Z: Ms.49.20.Zelada (52r.18-52v.9)

Foto ⑦「盧溝運筏図」(部分,前掲『盧溝橋』)

The control of the co

um mite laume allo appear, andre y grant, most loss of terms of four milkes for mourbon cours who facts al a wedningste trapping and the state of th

one of the control of

Foto ® F: Ms.fr.1116 (49r.a23-b21)



Foto 9 FA²: Ms.fr.2810 (49r)

minimo rede bourdar read outminimo labor despos funcione
minimo labor despos funcione
minimo labor despos funcione
minimo labor despos funcione
labor de fiftem conclusivos desircitatos delines cates unimo influencio
estre minimo sumo influencione
delle minimo discone
delle lamo delle delle delle
minimo di prose con estrono le
minimo di prose con estrono
minimo di prose
minimo di prose con estrono
minimo di prose
minimo di

where cross of omercean pamer amount bound from a deflecting the common pamer. The common pamer are constructed to the common pamer and the common through the common pamer and t

pillate issulfrengene weegthe millent stade to their assertant mederal laume of the millent stade is the millent stade of their assertant mederal laume of their assertant mederal transfer stade friender einer trade somme nederantalisten stade of their assertant mederal mederal transfer see fande trade trade transfer see fande trade trade transfer see fande trade t

Foto ⑩ F: Ms.fr.1116 (75r.a18-75v.a33)



Foto (1) Z: Ms.49.20.Zelada (55v.1-56v.17)